

「練達から希望を」「自分のタラントンを分け合う」

「ローマの使徒への手紙 5章1節～」 「マタイによる福音書25章」 14節～

米山容子

クリスチャンホームに生まれながら40年以上、信仰から遠ざかっていた私が神様の前に突然立ったのはおととしの6月、場所は広島大学病院救命救急集中治療室でした。

それまで私は広島の教会には全く一面識もありませんでした。しかし、自分の娘を葬る、という突然の事態に遭遇したとき天の神様におすがりするしことしか頭に浮かびませんでした。全く勝手なものです。紹介も何もなく、電話帳で調べ、広島教会に電話をし、電話口で事情をお話ししましたが、そんな依頼にもかかわらず、すぐに武田牧師が駆けつけて下さいました。そして集中治療室の、臨終の枕元で看護師の反対を押し切って讃美歌493を歌いました。「いつくしみ深い 友なるイエスは 憂いも罪をも拭い去られる・・・」歌い始めた瞬間、苦しみながら死を自ら選んだ娘の魂を神様が救って下さることに、涙があふれました。

葬儀の後、教会に足を運んだ私に武田牧師はキリスト教の信仰は「永遠の命」への信仰であること、永遠の命とは現世に生きていたまま御国で長らえることを言うのではない。死んだ後にイエスキリストに購われた新しい命が神様の身元で永遠に生き続けることである、と説き明かして下さいました。一度暗黒の底に落ちて無になってしまった自分が、一から生き直す道を探す上で、「娘が御国で永遠の命を与えられて私を見守ってくれている」と信じることはどれほどの力になったことでしょうか。このときに信仰に出会っていなかったら今の私も「小さな一歩」の活動もなく、いま皆さまにお会いすることもない。神様のお恵みと出会いに感謝します。

9月から入信の勉強をし、12月第1回目の主日礼拝で洗礼を受けました。その日、50年間以上信仰を続けてきた85歳の父が同席し、礼拝後に、「私は、長い信仰生活の中で子どもたちには信仰を強要するのではなく、自分の意思で信仰の道を選んでくれたらいいと思ってきましたが、それがこのようなきっかけになるとは、思いもしませんでした。神様のご計画はきびしい・・・」と泣きながら絶句したことが忘れられません。その父は私の「小さな一歩」の活動を応援してくれましたが、今年の5月に突然の病で昇天いたしました。今は娘と共に御国で私を応援してくれていると思います。

そのような強い想いで始めた信仰生活でしたが、人間の心はなかなかすぐに整理できるものではありません。その後も、希望のない暗い心の日々は続きました。神様の愛やお導きについて何度教会で学んでも、私は娘の突然の死について答えが得られず、神様を見上げ、「娘はどのようなご計画により、25歳の若さで御国に召されたのでしょうか」「これは罪深い私への罰なののでしょうか、ならばなぜ私を苦しめなかったのでしょうか、この私にあなた様はどのような使命を与えようとされるのか」と問い続けました。

そんなある日の礼拝で『ローマの使徒への手紙 5章の一節に触れました。「わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである」』

その時、「今は苦しみに耐えるだけしかない毎日だが、これが自分の中で錬達し、希望へと変わる日が来るのかもしれない」と、一筋の光を得たような気がしました。

「自分にとっての錬達とはなんだろう」と考えているうちに、漠然と同じ苦しみを持った人たちと想いを共にし、互いに支え合うことではないか、また、いま、心の病から生きる希望を見失い、苦しんでいる人に対して何か力になることではないか、と思うようになりました。しかし、頭の中にあっても中々行動に移せず、悶々とした日々を送っていたそんなある日の礼拝で、「マタイによる福音書25章14節 タラントンのたとえ」を読みました。「自分が与えられたタラントン（才能とか持分とか）を使わずに埋もれさせるのではなく、思い切って外に出で、多くの人と交換しあい、成長させて帰ってきなさい」との解き明かしがあり、これは、私も神様から「新たに歩み出してあなたの持てるものを分かち合ってきなさい」と背中を押されているのではと感じました。それがちょうど今年の今頃です。そして今年の2月に小さな一歩・ネットワークひろしま」という自助グループを立ち上げました。「小さな一歩」という名前は、苦しくつらい思いから、いっぺんに脱け出すことはできないし、無理にがんばろうとすることはよくない。でも、昨日より今日、今日より明日、というように小さな一歩をふみだす勇気を持ちましょう、という意味です。また、ネットワークひろしま、とつけたのは、1人で歩むのではなく、仲間と一緒に繋がって歩んでいきましょう、という思いがこめられています。また、歩という字は娘の名前の一文字でもあります。

広島教会の集会室をお借りして偶数月第3土曜日に「自死遺族の希望の会」、奇数月第3土曜日に「うつ症状のある方と家族の会」を開いています。分かち合いというのは、それぞれ当事者だけが集まり、心の澱や苦しみを語り合うものです。そこには精神科の医師も、心理職の専門家もいません。専門的な助言を仰ぐ会ではありません。ただ、想いのたけをお互いが受け止めあうために集まります。そして、決して他の人の想いを否定したり自分と比べない、求められない助言はしない、というのがルールです。語るだけで気持ちが晴れることもありますし、語らなくても同じ想いの方の話を聞いて共鳴したり、心を整理するきっかけを得ることができることもあります。「ここに来てよかった」「たくさん話げできた」「2か月に1回、この場所で亡き人への想いにどっぷり浸かって泣いて、またがんばれる」と言われると、「やってよかった」と安堵と喜びの気持ちに満たされます。ただ、個々に心の荷物の中身は異なり、そのいきさつや気持ちの状態も違いますし、時間も限られているので、か

み合わない想いをしながら帰る方がいたのでは、話したりず、心をさらけ出せなかったのでは、と毎回、会の終了後に自分の無力さ、力の至らなさを悔やむことも少なくありません。

そんなときに心に刻むのがマタイによる福音書の一節です。

「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あなたがたに言うが、彼らの御使（みつかい）たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである。」（マタイ18章10節）

この言葉を思い出しながら、神様は広島教会に集う「心に重荷を背負う、小さき者たち一人一人に天使を遣わし、御顔を向けて心の重荷を軽くして下さっていることを信じます。自分は無力な存在ですが、他の場所では得られない、ここには神様の愛がある、と気持ちを強くしています。

分かち合いに集まる人々の中には、辛い別れ、突然の不幸や自分の心の病に至るまでに、またはその辛い経験の後にも、複雑な人間関係に直面して、何重にも苦しめを受けてきた人が少なくありません。

多くの方は言葉の暴力によって傷ついています。ただ、それは必ずしも悪意によるものではありません。多くは、その人の気持ちをよく理解しないまま通り一遍の慰めや励ましによってかえって傷つけられています。中にはその人によかれと思って投げかけられた言葉もあります。

例えば「もう」「まだ」という、時間で区切った言い方をされることが多いのです。「もう元気になった?」「まだくよくよしているの?いいかげんに考えを変えてがんばりなさい」「もうその話は何度も聞いたし、言っても仕方ない話はやめた方がいい」といった、勇気づけるつもりで言われた言葉で傷つく人は多くいます。また、「心配していたけど、元気そうじゃない。もう大丈夫ね」といった声掛けも実はその方を傷つけます。多くの方が心の中には言えない傷を持ちながら、それを表に出せず、無理に笑ったり、元気にしているからです。中には、時がだいぶ過ぎても同じ悲しい話や、自己否定の言葉を何度も繰り返す人もいますが、1年くらいは親身になって聞いてくれた周囲の人が、だんだん真剣に聞いてくれなくなって「人に話すこともできない。立ち直らなくてはいけない、でもわかっていても気持ちを切り替えることができない自分が情けない」と苦しんでいる人もいます。皆様の近くにそのような方がいたら、どうぞ何度でも同じ話を聞いてあげてください。

逆に、辛い喪失経験の後にも涙を流さない人もいます。その人も決して冷たい心の人でも鉄の意思を持った人でもありません。あまりに哀しみが深すぎて、自分を守るために感情の動きを止めている人もいるのです。そのような方を「あの人は心が強いから大丈夫」と決めつけないでください。

強い苦しみや傷みを経験した人が回復するには長い時間がかかります。その道筋もそれぞれに違い、他人が理解できないことも多いのですが、無理に理解する必要はないのです。だから「わかる、わかるよ」という言葉ではなく「そうなんだね、そういう気持ちなんだね」と声をかけながら話を聞いてあげてください。

私が最近座右の銘にしている言葉に『ペイ・フォワード』という言葉がありまして、これはアメリカ映画から生まれた言葉なのですが、「人は他人から厚意（親切）を受けた場合、その相手にお返しをしようとするですね。そうすると、その厚意は当事者間のみで完結して終わってしまいます。しかし、この“厚意”（親切）を受けた相手に返すのではなくて、次の人に別な形で『渡して』みたら、どうなるでしょう？それを、1人の人が別の新たな3人に『渡して』いったとしたら・・・」という考え方、つまり、「親切のネットワークビジネス」ですね。私が絶望のどん底にいたときに、すぎるように訪ねていった各地の「自死遺族の分かち合い」でいただいた、多くの方からの温かい言葉で救われた想いを、このペイ・フォワードという形で、これからも地道に続けていきたいと思っています。今後も分かち合いの会を隔週ごとに続けながら、年に何回か、心の癒しにつながるミニイベントや、ミニ講演会なども企画していきたいと思っています。

もし身近な方に、必要とされている方がいらしたら、この会のことをそっと伝えていただければたいへんうれしく思います。

今日はつたないお話しでしたが御清聴ありがとうございました。この会にお招き下さった澤村先生に感謝いたします。何より、この場に導いて下さったご在天の父なる神様に感謝いたしまして私のお話しを終わらせていただきます。